

〔調査報告〕

運動・スポーツ指導者の養成カリキュラムの検討 ー模擬指導の評価記録を中心にー

近藤 剛 織部 勇太

— 目 次 —

1. はじめに
2. 科目の概要
3. 模擬指導の成果と課題についての考察
4. まとめ

キーワード：運動・スポーツ指導者養成，模擬指導，指導評価

1. はじめに

21世紀に入った日本では、少子高齢化の進展や社会環境の変化の中で、国民がそれぞれのライフスタイルに応じて運動やスポーツ活動に親しむことで、健やかで心豊かに生活できる社会の実現を目指そうとする動きが活発になった。具体的施策としては、国民の健康増進の総合的な推進を図ることを目的とした国民健康づくり運動「健康日本21（第二次）」などが挙げられる。そうした中であって、運動・スポーツ指導者に対する社会的ニーズも高まりを見せるようになり、大学などの高等教育機関においても従来の体育教員の養成に加え、関係団体との連携

KONDO, Tsuyoshi 四国学院大学文学部准教授、体育学専攻
ORIBE, Yuta 四国学院大学非常勤講師、社会学専攻

のもと運動・スポーツ指導者の養成課程を新設するところが多くみられるようになった。四国学院大学においても従来のカリキュラムをそのままに、2018年度より日本トレーニング指導者協会認定トレーニング指導者の養成校として、所定の単位を取得した学生に認定試験の受験資格を与えることが可能となった。⁽¹⁾⁽²⁾ 養成校として承認されるにあたりカリキュラムの変更を必要としなかったことは、四国学院大学の健康・スポーツ関連のカリキュラムが、以前よりすでに運動・スポーツ指導者養成のための条件を満たす状況にあったことを示唆するものである。

その一方で、2013年以降、日本の体育・スポーツ界では学校教育現場での体罰問題に端を発し、運動・スポーツ指導者の在り方が強く問われるようになった。そうした流れを受け、日本体育協会（現・日本スポーツ協会）がスポーツ庁から受託した「コーチング・イノベーション推進事業」において、よい指導者（グッドコーチ）育成のための指針「モデル・コア・カリキュラム」を2016年に取りまとめるなど、関係団体の間では望ましい運動・スポーツ指導者の養成を目指し、その方法を再検討する動きが活発化してきている。こうした状況の中で、四国学院大学においても、よい運動・スポーツ指導者を輩出するという社会的責務のもと、よりよい指導者を養成するために現状を批判的にとらえ、カリキュラムをよりよく改善していくことが求められる。

しかし、これらに関連した研究報告や実践事例は少なく、具体的な成果や課題についても十分な検討がなされていない。また、養成課程での模擬指導を扱ったものについては皆無に等しい。よりよい運動・スポーツ指導者の育成が求められるなか、具体的な実践や記録をもとにした大学の養成カリキュラムを検討していくことに本研究の意義がある。

以上から本研究では、四国学院大学での模擬指導に関連した授業実践を事例として取り上げ、その成果と課題について考察し、今後の運動指導者養成カリキュラムの改善を図る基礎資料を提供することにしたい。

2. 科目の概要

1. 対象科目

本研究では、日本トレーニング指導者協会認定トレーニング指導者養成科目に

並べられている、四国学院大学社会学部の三年次前期科目「健康・スポーツ指導者論Ⅰ」と三年次後期科目「健康・スポーツ指導者論Ⅱ」の2016年実施の授業を対象とした。これらは別科目であるが、運動・スポーツ指導者の養成方針を共有し連動性をもった展開を行っている。そのため、「健康・スポーツ指導者論Ⅱ」の履修条件に「健康・スポーツ指導者論Ⅰ」を履修していることが望ましい旨を挙げている。二つの科目のうち、「健康・スポーツ指導者論Ⅰ」では主に運動・スポーツ指導の理念や背景、指導方法などを取り上げ、これら一連の学習内容を踏まえた指導方法の実際に関する学びと模擬指導の実践を「健康・スポーツ指導者論Ⅱ」で行った。「健康・スポーツ指導者論Ⅰ」は26名、「健康・スポーツ指導者論Ⅱ」は21名が受講した。

2. 「健康・スポーツ指導者論Ⅰ」

「健康・スポーツ指導者論Ⅰ」では、現代社会のなかでの運動やスポーツの意義と、そこに関わる指導者に求められる資質や能力について学習し、多様化する運動・スポーツ実践者の状況に応じた指導の重要性を理解することを目的とした。また、受講生には後期の模擬指導の実践を前提として授業を展開することをオリエンテーションで伝達した。

表1は授業内容の展開を示したものである。1～5回目は用語の理解や国内の関連法規に加え、健康・スポーツ指導者の役割と指導全般に関わる基礎的な資質や能力に関する内容を取り上げた。また、6～10回目までは運動・スポーツ実践者の状況に応じた指導法と指導上の留意点などについて授業を行い、11回目以降は運動・スポーツ指導者として常によりよい指導を迫及する向上心と、それを実現させるための情報収集の重要性という観点から授業を展開した。

表1 「健康スポーツ指導者論Ⅰ」の授業内容の展開

回	内 容	回	内 容
1	オリエンテーション	9	多様化する運動・スポーツ実践者③ －発育発達期と運動・スポーツ
2	「健康」の概念	10	多様化する運動・スポーツ実践者④ －競技的運動・スポーツ
3	国内の健康及びスポーツ関連施策 －過去と現在について	11	新たな運動環境と健康・スポーツ指導① －科学的根拠の変遷
4	健康・スポーツ指導者の役割	12	新たな運動環境と健康・スポーツ指導② －指導法の変遷
5	健康・スポーツ指導者に求められる資質と能力	13	わが国のこれからの健康・スポーツの方向性
6	実践者の運動継続を支える心理的側面	14	わが国のこれからの健康・スポーツ指導者育成の方向性
7	多様化する運動・スポーツ実践者① －生活習慣病と運動・スポーツ	15	まとめ －望ましい健康・スポーツ指導者のこれからの在り方について
8	多様化する運動・スポーツ実践者② －介護予防（加齢）と運動・スポーツ		

3. 「健康・スポーツ指導者論Ⅱ」

「健康・スポーツ指導者論Ⅱ」では、「健康・スポーツ指導者論Ⅰ」の授業内容を踏まえて授業を展開した。先述の履修条件を設けたところ、多くの受講生が前期からの継続履修者であった。表2が授業内容を示したものである。5回実施していることからわかるように、模擬指導をこの授業の中心的内容に据えた。

模擬指導を実施するにあたり、受講生に提示した条件は表3の通りである。多くの受講生に指導経験がないため、自由な発想のもとで経験を積ませることを重視し、制約をできるかぎり少なくした。ただし、対象は特定の年齢層や性別に偏ることを防ぐため事前に指定した。そのほか、模擬指導実施以前に運動指導計画

表を各自に作成・提出させ、筆者が確認後に返還し、それをもとにグループで指導計画表を作成させ、それを模擬指導時に提出させた。

次に、表4では授業内容「模擬指導」及び「模擬指導の反省とフィードバック」のときの授業の進め方を示した。模擬指導を実施するときには、①模擬指導の説明、②模擬指導、③模擬指導の反省という流れで展開した。模擬指導の説明では、事前に決定している実践対象者と指導のねらい、指導上の約束事などを担当するグループに説明させた。模擬指導の際には原則的にすべてを受講生に委ね、筆者は巡視と気の付いた点をノートに書き留めた。模擬指導の反省では、まず授業評価とコメントを記入させ、その後に指導者役と受講者役双方の立場から数人に感想を述べさせた。また、筆者も模擬指導中の記録をもとに改善点を指摘した。

一方、反省・フィードバックの回では、①資料の配布、②指導評価の提示とフィードバック、③自己評価シートの作成の順で行った。資料の配布ではすべての模擬指導の指導評価とコメントをまとめ、全員で内容を共有化できるようにした。指導評価の提示に当たっては、項目ごとの各グループの指導評価と全体平均との比較や、場面と内容（肯定的・否定的）に分類したコメントを提示し、客観的なデータに基づいた指導や助言を行った。自己評価シートの作成では、指導評価の結果とフィードバック作業を踏まえ、模擬指導における反省と課題について記入させた。

表2 「健康・スポーツ指導者論Ⅱ」の授業内容の展開

回	内 容	回	内 容
1	オリエンテーション	9	模擬指導①
2	よい健康・スポーツ指導の条件	10	模擬指導②
3	活用教材の工夫	11	模擬指導③
4	健康・スポーツ指導の方法	12	模擬指導④
5	指導の実際① －実践者の観察と相互作用	13	模擬指導⑤
6	指導の実際② －効果的なマネジメント	14	模擬指導の反省とフィードバック
7	指導の実際③ －効果的なインストラクション	15	まとめ
8	指導の実際④ －運動有能感と指導		

表3 模擬指導の条件

対象	・高齢者①（人間関係作りを重視したいと考える集団） ・高齢者②（加齢による筋力の低下を少しでも抑制したいと考える集団） ・中年者（生活習慣病を憂慮し運動不足を解消したいと考える集団） ・壮年者（運動を楽しみながらも技術の向上に目標を置く集団） ・児童・生徒（基本的な運動動作からより発展的な技術や技能の習得を目指す集団）
教材	各グループで自由に選択
時間	60分程度
指導者数	各グループで自由に選択
計画	各自で指導計画表を作成し提出後、模擬指導実施時にグループで作成した指導計画表を提出する

表4 「模擬指導」及び「模擬指導の反省とフィードバック」の授業の進め方

	模 擬 指 導	模擬指導の反省とフィードバック
指導の流れ ↓	①模擬指導の説明	①資料の配布
	②模擬指導	②指導評価の提示とフィードバック ・評価分析の提示 ・結果に基づいた指導と助言
	③模擬指導の反省 ・指導評価とコメントの入力 ・感想	③自己評価シートの作成

4. 模擬指導の授業改善の方法

模擬指導の改善の取り組みとして、模擬指導終了後に指導者役と受講者役のすべての受講生に指導評価調査を実施した。すでに述べた通り、運動・スポーツ指導者養成に関わる模擬的指導の研究は極めて少ない。そのため、今回の評価項目は体育科教育学の知見を援用し、そこで用いられている「授業評価」（日野 2003）に若干の修正を加えて作成した。評価項目は表5に示したとおりである。この評価調査は指導場面における「学習の勢い」と「肯定的雰囲気」に焦点が当てられたものになっている。体育科教育学における「学習の勢い」とは運動を含む学習時間が十分確保され、規律ある学習環境のもと時間内の学習量や学習密度が高い状況のことであり、「肯定的雰囲気」とは指導者の賞賛や励ましによって学習者同士で声をかけ合うなど和やかで温かな雰囲気のことを指す（高橋 2010）。これらの要素は、決して学校教科体育においてのみ重視されることなく、運動・スポーツ指導者にも当然のことながら求められる素養であり、受講生にはこれらを意識して実践できる力を身につけてもらいたいと考えた。そのほか、安全面に対する配慮や効率的な指導環境に関する項目もある。これらの項目を、受講生は「大変よく当てはまる」を5点、「よく当てはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまり当てはまらない」を2点、「全く当てはまらない」を1点として5点満点で評価し、平均点を算出した。

また、授業評価調査のほかに、模擬指導を振り返っての具体的に良かった点や改善点を自由記述でコメントさせた。それを場面や内容に分けて整理し、模擬指

導の反省とフィードバックの時間に資料として配布した。

表5 模擬指導の評価表

項目	評価（5点満点で○をつける）				
①指導のねらいと目的が明確だった	5	4	3	2	1
②指導の進め方や学び方が明確だった	5	4	3	2	1
③運動指導（学習）のまとめが明確だった	5	4	3	2	1
④受講者の様子を積極的に観察・巡視していた	5	4	3	2	1
⑤発問や応答・受理を積極的に与えていた	5	4	3	2	1
⑥賞賛や励ましを積極的に与えていた	5	4	3	2	1
⑦助言やアドバイスを積極的に与えていた	5	4	3	2	1
⑧受講者一人ひとりに積極的に関わっていた	5	4	3	2	1
⑨準備や移動の時間が少なかった	5	4	3	2	1
⑩運動時間が十分に確保されていた	5	4	3	2	1
⑪学習資料が有効に活用されていた	5	4	3	2	1
⑫安全が十分に配慮されていた	5	4	3	2	1
⑬よい運動指導であった	5	4	3	2	1

日野（2003）の「授業評価」を加筆・修正した

表6 対象者「中年者」の際のコメント（一例）

説明	○準備などの間の時間が短くて良かった ×誰かを見本として見せることができればよかったのではないかな ×説明が曖昧で運動場面での動きが分からなかった ×ストレッチや準備運動の時間が少なかった、安全への配慮が足りたのではないかな
----	--

運動場面	○思いのほか運動量があった ○トレーニングのセット間の休息時間が適切だった ○メタボリックシンドロームの人でもできる内容だったと思う ○ゲームにだんだんと制限を加えていったことがよかった ○普段あまり知らない体幹トレーニングを知ることができた ×受講生が積極的に楽しめる方法を考えてほしかった ×退屈で充実感を得られなかった ×指導者の観察と言葉がけが少なかった
その他	○指導者の役割分担ができていた ○指導の目的と対象者を意識していた ×実践者が全体を通して楽しんでいなかった

「○」は良かった点、「×」は改善点として表記した

3. 模擬指導の成果と課題についての考察

模擬指導を実施したことのねらいとして、一つは指導計画に基づき実際に指導を行わせることで指導力そのものを向上させることがある。また、模擬指導を反省し検討する活動を通して、指導場面で実際に生じる様々な問題点や課題を理解することも挙げられる。以上を踏まえた上で、受講者側と指導者側の双方の授業評価とコメント、自己評価シートの内容を分析することで、模擬指導の成果と課題について考察する。

1. 受講者の模擬指導評価とコメント

受講者の行った評価を表7に示した。模擬指導は対象を緩やかに限定したものの、教材や指導形態に大きな制約を加えなかったため、採用した教材はバスケットボールやフットサル、各種レクリエーションといったようにかなりの運動量が求められるものから、筋力トレーニングなど比較的、大きな運動動作を必要としないものまで幅広かった。また、少しでも多くの受講生に指導経験を積ませたいとの思いから、指導者役を毎回変更したこともあって、指導評価は模擬指導ごとにかんがりのばらつきが見られる結果となった。しかし、その中で「勢い」を生み

出すための基礎的条件となる運動時間について、指導評価項目10「運動時間が十分に確保されていた」を見てみると、すべての指導において4.50以上と高く推移しており、他の項目と比較しても上位二番目の高評価を得ている。これは1回目と2回目の模擬指導が教材として「レクリエーション」を採用した際、指導後の反省で十分な運動時間の確保に言及する意見が出たことが影響し、その後の指導計画や教材などが運動時間の確保に配慮したものに修正され実行されたからであると思われる。1、2回目の受講者側の評価も決して低い値ではなかったが、3、4回目の評価ではともに最高評価5.00をつけた。5回目が4.54と少し下がるのは、対象が筋力の低下に悩む高齢者であったことから、相対的に安全への配慮が高まり運動強度を下げたことが影響していると思われる。

また、受講者にとっての「肯定的雰囲気」づくりに欠かせない指導者の言葉がけに関連し、指導者と受講者のコミュニケーションすなわち「相互作用」を示す項目5～8は全体を通して上昇傾向を示した。コメントも模擬指導の回を重ねるにしたがって指導者の受講生へのかかわりを評価するものが増えた。これは、模擬指導の前段階の授業で、指導者の肯定的で積極的な発言は受講者の運動への動機づけにつながることを理由に重点的に触れ、模擬指導後の反省でも繰り返し言及したことが影響したと思われる。これらの結果から、指導者の肯定的な言葉がけに関しては、指導者自身の意識づけによって実施の頻度と内容の高まりを可能にすると考えられる。一方で、そうした肯定的関わりの前提となるのは項目4「受講者の様子を積極的に観察・巡視していた」で評価される指導者による観察であり、こちらは平均値4.43が示すように指導者が高い意識をもって受講者の観察に取り組んでいたことが分かる。ただ、こうした観察活動に対して、項目5～8の平均値はすべてこれを下回っていた。これは観察行動が頻繁に行われながらも、それに対応する指導者の相互作用行動が十分に現れなかった状況を示すものと思われる。こうした現象がおこる理由として、指導者側の専門的知識や自信の不足、複数の指導者が存在した場合の責任所在の不明などが考えられる。コメントにも技術指導の少なさを指摘するものが少なくなかった。このことから、指導者には最新の科学的知見を基にした指導理論を常に備えておく姿勢が求められると言える。また、模擬指導に至るまでに、「健康・スポーツ指導者論Ⅱ」の授業だけではなく「健康・スポーツ指導者論Ⅰ」でも理論に関する学習にかなりの時間を設

けていたにもかかわらずこうした結果となったことは、双方の科目の連動性をより高めるカリキュラムの再検討が必要であろう。具体的には「健康・スポーツ指導者論Ⅰ」においても実践への意識を高めるために複数回の模擬指導を取り入れることが望ましいと思われる。

項目12「安全が十分に配慮されていた」に関して、運動・スポーツ指導は怪我や事故と常に取り合わせであり、安全の管理には細心の注意が求められる。第3回目の模擬指導時のコメントに一部「転倒した受講生などにはその都度、状況の確認をすべきだと思う」との意見があった。反省時でそれを指摘された指導者役は、「比較的体力のある壮年者を対象としており、その後も継続して運動していたので必要に感じなかった」という趣旨の返答をしたが、対象や教材に関わらず、指導者には受講生の安全確保のために一層の注意喚起と意識づけが求められる。

表7 受講者の模擬指導評価

評価項目	模擬指導						
		1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	平均
	対象 教材	高齢者① レクリエーション	中年者 レクリエーション	壮年者 バスケットボール	小中学生 フットサル	高齢者② 筋力トレーニング	
①指導のねらいと目的が明確だった		4.47	3.92	4.50	4.46	4.38	4.35
②指導の進め方や学び方が明確だった		4.73	4.00	4.42	5.00	4.31	4.49
③運動指導(学習)のまとめが明確だった		4.47	3.83	4.17	4.85	4.38	4.34
④受講者の様子を積極的に観察・巡視していた		4.40	4.17	4.50	4.77	4.31	4.43
⑤発問や応答・受理を積極的に与えていた		4.13	3.75	4.00	4.31	4.23	4.08
⑥賞賛や励ましを積極的に与えていた		4.07	3.75	4.42	4.62	4.00	4.17
⑦助言やアドバイスを積極的に与えていた		3.87	3.75	4.17	4.54	4.54	4.17
⑧受講者一人ひとりに積極的に関わっていた		4.00	3.67	4.58	4.62	4.00	4.17
⑨準備や移動の時間が少なかった		4.80	4.17	4.67	4.85	4.23	4.54
⑩運動時間が十分に確保されていた		4.67	4.67	5.00	5.00	4.54	4.77
⑪学習資料が有効に活用されていた		4.40	4.17	3.92	4.69	4.54	4.34
⑫安全が十分に配慮されていた		5.00	4.50	4.25	4.69	4.46	4.58
⑬よい運動指導であった		4.93	4.50	4.83	5.00	4.62	4.78

2. 指導者の指導評価とコメント

指導者の評価を表8に示した。指導者の模擬指導評価にも受講者評価と同じく結果にばらつきが見られた。指導者評価は回答者が4～5名と少ないことも影響し

ている。それを踏まえた上で全体的な傾向を見ると、ほとんどの項目で受講者評価よりも低い値を示している。多くの受講生にとって初めての経験とあって、自信が持てずに自己肯定感の高まりが見られなかったものと考えられる。そのなかで「勢い」を示す項目10は、受講者と指導者の平均が近い値を示した。指導者の意識を受講者側も感じられるほど運動時間が確保されていたということになる。ただ、個別にみていくと5回目の高齢者②を対象としたときの模擬指導では、指導者側が5.00としたことに対して受講者側は4.54となっており差が見られた。これは、指導者側は十分な運動時間を確保したと捉える一方で、受講者の中には若干不足すると感じた者がいたことを示唆している。このことから、受講者の運動量や時間に関するニーズを高めるには、指導の際にあらかじめ受講者の体力や健康状態、希望する運動量などを把握することが重要であると考えられる。

次に「肯定的雰囲気」をつくる前提となる項目4も受講者の評価とほぼ同じであった。指導者も観察・巡視の重要性を念頭に、積極的に受講者の間を分け入って行動した様子がうかがえる。ただ、雰囲気づくりの要素となる相互作用を示す項目5～8は、受講者と同様に項目4に対していずれも低い値となり、かつ受講者の評価と比較してもその差が大きいことが特徴的である。これは、指導者の相互作用の重要性を認識する一方で、実際の指導場面では効果的な言葉がけが十分にはできなかったことを強く自覚していることの証左と言えよう。コメントでも「積極的にアドバイスをするべきだった」、「技術的な指導をもっと加えるべきだった」などの内容が目立った。先述したが、指導者の資質や能力として対象や教材に関する専門的知識・理論の習得と集団指導体制時の指導者間の連携の重要性を再認識させる結果となった。ここからも「健康・スポーツ指導者論Ⅰ及びⅡ」の科目や他の関連科目との連動性を高めていく必要が感じられる。

そのほか、指多くの指導者が難しさを感じたのが項目9「準備や移動の時間が少なかった」ことに関連する内容であった。準備や移動といった時間に多くの時間を割くということは、代わりに運動時間が減少することになる。指導者は受講者を活動に効率的な場所へ集合させ、端的でわかりやすく明確な説明を施すことが求められる。コメントには「説明を明確に伝えられなかった」、「思っていたように人を動かすことができなかった」といった内容が記されていた。項目9の値に回を追っても改善の傾向が十分に表れなかった要因として、ほとんどの

受講生にとって初めての指導経験で、かつ一度きりの実践であったため、準備や移動のイメージが掴めなかったことが要因として考えられる。これは、指導者養成の過程での模擬指導経験の重要性を示しているとも言える。

表8 指導者の模擬指導評価

評価項目	模擬指導						
		1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	平均
	対象 教材	高齢者①	中年者	壮年者	小中学生	高齢者②	
		レクリエーション	レクリエーション	バスケットボール	フットサル	筋力トレーニング	
①指導のねらいと目的が明確だった		4.75	3.67	4.75	4.25	5.00	4.48
②指導の進め方や学び方が明確だった		4.25	3.67	4.25	4.50	4.67	4.27
③運動指導(学習)のまとめが明確だった		4.50	3.67	4.00	4.50	4.33	4.20
④受講者の様子を積極的に観察・巡視していた		4.50	3.67	4.50	4.75	4.67	4.42
⑤発問や応答・受理を積極的に与えていた		4.25	3.00	4.00	4.00	2.67	3.58
⑥賞賛や励ましを積極的に与えていた		4.25	2.00	4.00	4.50	3.67	3.68
⑦助言やアドバイスを積極的に与えていた		4.00	2.00	3.75	4.00	2.67	3.28
⑧受講者一人ひとりに積極的に関わっていた		3.50	2.33	3.75	4.00	2.67	3.25
⑨準備や移動の時間が少なかった		4.50	3.33	4.25	4.75	3.67	4.10
⑩運動時間が十分に確保されていた		4.50	4.67	4.50	5.00	5.00	4.73
⑪学習資料が有効に活用されていた		4.25	3.67	3.75	4.25	5.00	4.18
⑫安全が十分に配慮されていた		5.00	4.67	4.00	4.25	4.67	4.52
⑬よい運動指導であった		4.00	3.33	4.75	4.75	3.67	4.10

4. まとめ

本研究の目的は、運動・スポーツ指導者養成カリキュラムの改善を図る試みの一つとして、四国学院大学の2016年の3年次科目「健康・スポーツ指導者論Ⅰ」（前期）と「健康・スポーツ指導者論Ⅱ」（後期）を取り上げ、主に模擬指導の実践とその評価記録をもとにした成果と課題について検討することであった。結果は以下の通りである。

- ・運動の指導経験が少ない受講生にとって、反省を繰り返しながら実践した模擬指導は、指導上の課題や問題点について体験的に理解する機会となった。特に指導上必要と思われる「勢い」や「肯定的雰囲気」の重要性についての認識は、

指導経験を通してかなり高まったように思われる。

- ・指導者として受講者との間の相互作用の必要性を理解し、積極的に巡視を行うなどの観察行動が見られたものの、効果的な言葉がけには十分につながらなかった様子が見てとれた。指導現場の「肯定的雰囲気」の醸成に欠かせない相互作用を高めるには、対象や教材に関する専門的な知識や理論の習得と、他の指導者との連携が基礎的な条件になると考えられる。
- ・指導者として準備や移動の時間を減らし、運動時間を十分に確保するために、受講者を効率的な場所に集合させ、わかりやすく明確な説明能力を獲得することに模擬指導の経験は大いに役立つものと考えられる。
- ・すべての受講生に指導場面を提供するとの考えで模擬指導を展開したため、時間的制約から一人一回の実践となってしまった。そのため模擬指導や反省の経験が一人の指導者としてみた場合に具体的にどのように生かされ、どういった変化を生むのかといった視点での検証ができなかった。また、指導内容そのものではなく、対象に応じた教材の内容によって評価に差が生じたことも否めない。今後は指導時間や受講生の人数、指導内容を限定することを視野に効果的な実施方法を様々な実践から検討していきたい。
- ・模擬指導実施後に反省の時間を設けたものの、指導評価の結果をもとにした検討は「健康・スポーツ指導者論Ⅱ」の14回目の授業時のみであった。そのため、模擬指導を早い段階で実施したグループなどは記憶が曖昧になり、十分な検討が実施できない場面があった。反省・検討の作業をより活性化し効果的にするには、模擬指導実施後の次の時間は反省・検討会として確保し、評価結果に加えてVTR映像などを用いた指導内容の分析と解説を行うなど、カリキュラムの見直しが必要になる。
- ・運動・スポーツ指導者の養成のためには「健康・スポーツ指導者論Ⅰ」と「健康・スポーツ指導者論Ⅱ」及び他の関連科目とを効果的に連動させていく必要がある。今回、主に「健康・スポーツ指導者論Ⅰ」ではスポーツ科学の知見を基にした指導法の知識と理論を、「健康・スポーツ指導者論Ⅱ」では指導の実際と模擬指導を取り扱ったわけであるが、模擬指導の反省として専門的知識の欠如を理由とした相互作用の不足があった。この原因の一つに、前期の段階では指導実践への意識づけが不十分で、取り上げた内容が実践への応用として結

びつかなかったことが考えられる。このことから今後は「健康・スポーツ指導者論Ⅰ」でも模擬指導を取り入れるなど、養成カリキュラム全体を見通した検討が必要になる。

注

- (1) 日本トレーニング指導者協会（Japan Association of Training Instructors；略称JATI）は、2006年4月に設立し、同年8月に特定非営利活動法人として認可された団体で、①日本の環境や実状に合ったトレーニングの構築、②日本におけるトレーニング指導者資格の確立、③トレーニング指導者の社会的地位の向上と相互扶助、④教育、研修、指導者間の交流や情報交換の促進を目指す国内のトレーニング指導者により組織されている。また、法人の目的として、その定款において「スポーツ選手をはじめとして、老若男女、また障害の有り無しを問わず、様々な人々やその運動指導者に対して、健康やスポーツの向上のための啓発活動に関する事業等を行い、『青少年の健全育成』、『生涯スポーツ、競技スポーツの発展』及び『高齢者や子供を含む全ての人々への健康増進』に寄与することを目的とする」ことが明記されている。（日本トレーニング指導者協会「特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会定款」，<https://jati.jp/about/artic.html>，2018年12月25日閲覧）。
- (2) JATIの認定する資格として「JATI認定トレーニング指導者資格（JATI-ATI）」がある。本資格取得のためには、まずJATIへの入会手続きを経て個人正会員となり、次に認定試験の受験資格を取得し、最終的に認定試験に合格することが求められる。受験資格取得のためには、全8領域からなる「一般科目」と全5領域からなる「専門科目」から構成されたJATI主催の養成講習会をそれぞれ2日間の計4日間受講後、自己学習課題（ワークノート）を提出する必要があるが、この認定試験の受験資格取得にはいくつかの免除措置が取られている。そのうちの一つに、JATIの認定する養成校・養成機関で所定の科目の履修を済ませた場合に、養成講習会の受講と自己学習課題の提出が免除されるものがあり、四国学院大学の養成カリキュラムはこれに当たる。養成科目の一覧は以下の表の通りである。（日本トレーニング指導者協会「JATI認定トレーニング指導者資格の取得方法」，<https://jati.jp/license/acquisition.html>，2018年12月25日閲覧）

＜四国学院大学におけるJATI認定トレーニング指導者養成科目一覧＞

学年	学期	区 分	養 成 科 目
1 年	後期	基礎科目	健康管理概論
2 年	前期	専攻科目	トレーニング論Ⅰ
	後期	専攻科目	トレーニング論Ⅱ
	後期	専攻科目	健康・スポーツ栄養学
	サマー	専攻科目	健康・スポーツ生理学
	前期	専攻科目	健康・スポーツ測定評価概論
3 年	前期	専攻科目	健康・スポーツ指導者論Ⅰ
	後期	専攻科目	健康・スポーツ指導者論Ⅱ
	サマー	専攻科目	健康・スポーツバイオメカニクス
	後期	専攻科目	健康・スポーツ医学概論

下線部が本研究の対象科目

参考文献

厚生労働省 2012年「国民の健康の増進の総合的な推進を図るための基本的な方針」。

日本体育協会 2016年「平成27年度コーチ育成のための『モデル・コア・カリキュラム』作成事業報告」。

日野克博 2013年「体育教師教育カリキュラムの検討－愛媛大学での模擬授業の実践を例にして－」，『愛媛大学教育学部保健体育紀要第4号』，愛媛大学教育学部保健体育学教室，49-57頁。

高橋健夫 2010年「よい体育授業の条件」，高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編『新版体育科教育学入門』大修館書店，48-53頁。

佐藤敬広 2016年「本学における『アダプテッド・スポーツ教育』および『障がい者スポーツ指導者養成』について：他学部開講による学部共通教育の可能性を考える」，『保健福祉学研究第14号』，東北文化学園大学医療福祉学部保健福祉学科，49-55頁。

後藤豊・伊藤清良・徳永文利・眞鍋芳明「体育・スポーツ指導者養成のための実技授業改善に向けて－創発分析能力の養成に注目して－」，『国際武道大学研究紀要第31号』，国際武道大学，61-71頁。